

オール・アカペラ

2018.7.16

1996年、平成でいうと平成8年の2月。ある街の駅のガード下にある居酒屋に6~7人のメンバーが集まっていた。前年12月にあった、ある大学の音楽部混声合唱団の現役とOBの合同ステージのことが話題になった。大先輩とも言えるTさんがこう言った。「合同ステージで歌った三善晃の唱歌の四季は素晴らしかった。歌いながらあんなに感動したのは、長い合唱生活でも初めてだった。合唱団を立ち上げよう!」「わーい! やろうやろう!!」西日本各地に散らばっているため、とにかく、1ヶ月に1度練習をすることになった。合唱団Rinteの誕生である。

たいした力量もないのに、1ヶ月に一度の練習では積み上がっていくものも少なく、当初は1ヶ月に1度の飲み会状態。「ついでに歌も歌おか〜」ってな感じだった。最初の演奏会がここなら100年会館中ホールで2000年の12月だったのだが、立ち上げから3年くらいは行ったり来たりだった。

しかし、取り上げる作品は創団当初からアカペラが主で、今までそのスタンスは貫かれていると言っている。ちなみに、1996年6月に出演した奈良県合唱祭での演奏曲目もオールアカペラで、パレストリーナのSicut Cervus (谷川の水を慕う鹿のように)、清水脩の「月光とピエロ」より、コダーイのHoratii Carmen IIというもので、まあメチャクチャといえればメチャクチャだが、「アカペラでの演奏を中心に据えていく」「現代邦人作品ばかりではなく、ルネサンスから近現代までの古今東西のよい作品を取り上げていく」というところが読み取れる。

第1回の演奏会からプログラムには必ずアカペラの外国の作品を入れるようにしてきた。イギリスマドリガルや、ヴィクトリアのモテット、バードやタリスのアンセム…。ところが、これらの曲がお客様やどうかすると演奏するメンバーの評判がよくなかったりすることもある。もちろん、指揮者のアプローチの問題が多いのだろうが、とにかく「共感」的にリハーサルを重ねることで、「こんなに素晴らしい曲がある」「何百年も昔にこんなに美しい世界を描いた曲があった」ということを会場でも共感したいという思いだ。

何も私たちは、400年もの前のルネサンス期の作品やその後のバロック時代の作品、古典派といわれる作品を懐古趣味でやっているのではない。作品の中にある真実や、その世界に共感し、憧れるから取り上げるのである。より身近な邦人の作品や近現代の作品とまったく変わらないのだ。

しかしながら、東京や大阪、京都、名古屋などの大都市部以外では、マニアックな曲目だけでは演奏会は成立していかないので、いわゆる「編曲もの」などのより身近で親しみやすいものなどを組み合わせて演奏会を組んでいる。

今回の演奏会でも、中村八大が書いた懐かしいヒット曲、「夢で逢いましょう」「おさななじ

み」「遠くへ行きたい」「明日があるさ」をプロ合唱団であるザ・タローシンガーズのために編曲された作品「夢で逢いましょう」を演奏会のメインに据えて、後期ロマン派を代表する作曲家のブルックナーのモテット、昨年没後20年を迎えた20世紀後半の日本を代表する作曲家の一人である柴田南雄の最晩年の作品、「三重五章」から「万葉集の三つの歌」、現役でバリバリ活躍するイギリスの現代の作曲家マクミランとイギリス近代音楽の父とも言えるエルガーの作品を組み合わせたステージととても意欲的で、バラエティにとんだプログラムとなった。いろんな切り口で楽しんでいただけたら幸いです。

なぜアカペラなのか。

決して一般的によるあるピアノ付きのスタイルやオルガン、オーケストラなどと一緒に演奏するスタイルを否定的に捉えているわけではない。ピアノや楽器がつくことによって、音域がぐんと広がるし、表現や色彩も鮮やかになる。それもいいと思うし、そういうものを求めている作品も多くある。一方、声だけでしか表すことができない言葉のある音楽を、人の声だけでしかつくることのできない美しいハーモニーで描き出したいとも思うのだ。そのためには、耳を開き、響きを豊かにしていくしかない。

元々、アカペラという言葉はア・カペラであり、ラテン語で「教会風」という意味だ。グレゴリオ聖歌に始まる教会における音楽は、無伴奏であることが多く、アカペラと呼ばれるのだ。キリスト教会と切り離して考えることができないヨーロッパの合唱音楽はアカペラの作品が多いし、元々楽器はルネサンス期の終わり頃に歌の伴奏として始まったもので、その後楽器だけの演奏も行われるようになり、それがオーケストラに繋がっていくのだ。

教会といえ、今回演奏するブルックナーのモテットは教会で演奏するためにつくられた作品である。モテットとはミサの中で歌われるミサ曲などに代わって歌われるもので、テキストは聖書などから取れている。ブルックナーは生涯、信仰に身を捧げ、教会のオルガニストとして多くの時間を過ごした。彼の交響曲は20世紀の後半から世界中で演奏されるようになり、よく知られるようになった。彼の作品は祈りに満ち、大伽藍の中にいるようだが、今日演奏する作品もまさに祈りに満ちた作品である。いや、文化的背景や、歴史的背景の違いはあるけど、どの曲にも祈りがあり、独自の宇宙がある。

